

小学校家庭科と家事

赤塚 朋子・渡邊菜都美

宇都宮大学教育学部教育実践紀要 第5号 別刷

2018年8月3日

小学校家庭科と家事[†]

赤塚 朋子*・渡邊菜都美**

宇都宮大学教育学部*

小山市立羽川小学校**

小学校の家庭科は、生活の自立に向けての基礎・基本を学習する場である。小学校の家庭科での学びが家庭生活の土台となり、その後の生活を支えるものとなるのと同時に生活への考え方に大きく影響を与えるものとなる。そのため、小学校段階で家事についての大切さを指導することが重要であると考え。そこで本稿では、家事に焦点をあて、「子どもの家事への積極的参加態度の育成」に向けて、小学校の家庭科の中でどのようなことができるのかを考察し、具体的な授業提案を行うことを目的とする。小学校家庭科には、実践的・体験的に学ばせることによって子どもたちに「できた・分かった!」という自信を持たせ、「家でもやってみよう!」という意欲を持たせることができることがわかった。

キーワード：小学校、家庭科、家事

1. はじめに

「男性は仕事、女性は家庭」という性別役割分業意識は、今なお根強く残っている。なぜだろうか。

家庭において女性は、妻や母親としての役割を要求されている。その結果、女性の就労の多くが時間調節の可能なパートタイマーが多く、男女の賃金格差を招いている。性別役割分業意識は家庭内では特に大きな影響があると考えられる。それが家事である。家事の多くを母親や母親に代わる女性が担っている。

最近、『料理は女の義務ですか』（阿古真理、新潮新書、新潮社、2017）や、『「家事のしすぎ」が日本を滅ぼす』（佐光紀子、光文社新書、光文社、2017）と家事をテーマとした本が出版されている。共通して、女性の家事の負担の大きさを取り上げている。家事時間の国際比較（OECD Gender data portal, 2016, Time use across the world）では、日本の男性の家事時間は世界一最低である。

こうしたなかで、性別役割分業意識にとらわれず、一人ひとりが積極的に家庭に参加できるよう指導していくことが家庭科に求められる重要な役割であると考えようになった。

小学校の家庭科は、生活の自立に向けての基礎・基本を学習する場である。小学校の家庭科での学びが家庭生活の土台となり、その後の生活を支えるものとなるのと同時に考え方に大きく影響を与えるものになる。そのため小学校段階で家事についての大切さを指導することが重要である。

そこで本稿では、家事に焦点をあて、「子どもの家事への積極的参加態度の育成」に向けて小学校の家庭科の中でどのようなことができるのかを考察し、具体的な授業提案を行うことを目的とする。

2. 家事の定義

はじめに、家事とは何かの定義について考えておきたい。

『広辞苑』（第六版（新村出編、岩波書店、2008）によると、家事とは「①家庭内のいろいろな事柄。②家庭生活を営むための大小いろいろの用事。掃除・洗濯・炊事など」と書かれている。

『家事労働ハラスメントー生きづらさの根にあるもの』（竹信三恵子、岩波書店、2013、p ii）の中で家事は、「食事の支度、洗濯、繕いもの、掃除、

[†] Tomoko AKATSUKA*, Natsumi WATANABE**:
Elementary school home economics education
and housework

Keywords: elementary school, home economics
education, household activity

* School of Education, Utsunomiya University

** Hanekawa Elementary school

（連絡先：akatsuka@cc.utsunomiya-u.ac.jp）

子どもたちの学校の行事・・・とありとあらゆるものである。幼い子どもを育て上げて社会へ送り出し、弱ったお年寄りを日々支え、働き盛りの人々が英気を養って再び職場へ出かけていくための基礎をつくる重要な仕事でもある」と述べられている。

『家事と雑用』（矢島祐利・矢島せい子、岩波婦人叢書、1953、p.2）では、「家事というのは毎日の生活を営んでいくために必要な家の中の仕事です。その仕事のために家のそとへ出かけることもあります。それも家事です。家事はだいたい主婦の仕事となっています。少なくとも主婦のつかさどるものとされています。そういう仕事の種類と量は實にたくさんあります。一家の営みと直接に関係があるもの」と書かれている。

現在使用されている小学校家庭科の教科書では家事という言葉は使用されていない。その代わりに『新編新しい家庭科5・6年』（東京書籍、2015、p.7）では「健康で快適に生活していくための家庭の仕事」とある。『わたしたちの家庭科5・6』（開隆堂、2015、p.30）では、「家庭の仕事は、家族一人ひとりが健康で気持ちのよい生活をするために重要なものである」としています。

中学校の教科書では、『技術・家庭 家庭分野』（開隆堂、2016、p.15）では、「日々の活動する力を蓄え、心の安らぎを得たり、子どもを育てる、生活文化を育み伝えたりする家庭のはたらきを支える仕事」と明記されている。

高等学校の教科書『家庭総合』（開隆堂、2017、p.24-25）では、「食事、睡眠、入浴、娯楽、団らんなどの活動と、これらの活動を支える調理や洗濯、掃除、育児や介護などの家事労働」であり、「家事労働は、報酬がないために、職業労働に比べて低い評価しか与えられないことがあるが、私たちの健康と安全を守り、明日への活動力をつくり出す重要な労働」としている。

家事を専門とする学問である家政学では、「家事活動（household activity）とは、生命維持や再生産にかかわる生活運営活動のうち、①無償で行われている活動で、②自己の身体に直接かかわらないものを汎称した活動である。これからわかるように、たとえば家族や自分のために無償で行う調理や、育児や介護で「食べさせる」活動は家事だが、自分が食べるという活動は家事活動ではない。当然、家族の有無にかかわらず、単身者にも存在する」（『新版

家政学事典』（（社）日本家政学会編、朝倉書店、2004、p.177）と定義されている。

上記でみてきたように、家事は、労働や仕事として捉えられてきた現実があるが、生活そのものを支える活動としての位置づけが妥当であろう。そのため、本稿では、家事を、「食事や掃除、洗濯などの家庭生活を支えるために自らが行わなくてはならない、生活に必要な技能を要する家庭内の重要な活動」と定義して使う。

3. 家事の実態

小学生時代にどの程度家事に参加していたのか、また大学生になった現在どの程度家事をしているのか、アンケート調査を行った。母親や姉・妹・祖母など女性が多い家事を担っていることを明らかにし、男女間での家事への参加態度の違いを比較することにより、家事への積極的な態度を育成するために家庭科に求められるものを考察した。

家事アンケートは、大学生を対象に行った。

属性は、男女比は各50%で、自宅生が68%である。

(1) 小学生時代に誰が家事を担っていたか

すべての項目において母親が一番多く家事を担っているのが分かる。母親が担う割合が50%を切っているものは、食事の片づけ、風呂掃除、ごみ出しのわずか3つだけであった。担っている割合が一番高いのは、食事の準備である。次にトイレ掃除、買い物と続いている。父親が担う割合は、多くて31%である。自分が担う割合は21%止まりととても低い。

姉や妹は兄や弟よりも家事に参加していることが分かる。このことから、「女の子なのだから家事に参加すべき」という概念が家庭の中に存在しているのではないかと推測できる。男女の比率に注目すると、女性のほうが多く家事を担っており、「家事は女性がやるべきもの」という性別役割分業意識がまだに残っていることがうかがえる。しかし、定義で述べた通り家事とは、「食事や掃除、洗濯などの家庭生活を支えるために自らが行わなくてはならない、生活に必要な技能を要する家庭内の重要な活動」である。そのため、家庭科の中で家事の大切さと自分がやるべきものということを指導していくことが必要なのではないだろうか。

父親が30%を超えるのはごみ出しのみである。ごみ出しは通勤などで外出する際ついで行えるも

のであり、行うための技能が必要とならず時間的な制限もないため、父親が行う割合が増加したものと考えられる。自分が担っていた割合が一番高かったのは、風呂掃除である。洗剤とスポンジさえあれば大した知識・技能がなくとも行うことができ、小柄な体のほうがバスタブを洗いやすく危険性もないため、子どもに任せる親が多いのではないかと推測できる。反対に一番低い割合なのは、食事の準備である。これは、調理技術などが未習得なため「できない・難しそう」などの考えがあるからではないかと考えることができる。また、包丁や火は危険であると親が判断し、子どもに行わせないのではないだろうか。洗濯や掃除、買い物の項目でも自分が担っていた割合は一桁である。ここから、衣服を洗濯する技能や掃除・整理整頓の技能、商品の選択と購入についての技能が身につけていないから、積極的な参加になっていないのではないかと推測できる。つまり、家庭科の中で食事を作る・衣服を洗濯する・身の回りを整えるなどの生活に必要な技能を学習することが、子どもの家事参加を積極的にすることができるのである。

また、父親の担う割合が増えると、子どもが担う割合が増えている項目が見られることから、父親が積極的に家事に参加するようになれば、子どもの家事参加も積極的になるのではないかと考えられる。

家事の中には、「女性的家事」と「男性的家事」というものがある。「女性的家事」とは、料理や洗濯、掃除などある程度スキルが必要とされるものである。「男性的家事」とは、ごみ出しや風呂掃除などスキルを必要とされないものである。家庭内での男女の家事不平等は、労働時間の差やスキル格差などが要因と考えられる。

小学校の家庭科の中で、生活に必要な技能を学ばせつつ家事に参加する機会を積極的に与え、子どもの家事参加を促し、将来子どもたちが家庭を持った時にも男女関係なく家事に参加するよう教えることで、次世代の子どもたちも積極的に家事に参加するようになり、偏って家事を担うことがなくなるのではないだろうか。

母親のみが家事を分担するなどの偏りを軽減するために、小学校の家庭科では生活に必要な技能を習得させることはもちろん、家事への参加機会を与えること・誰もが家事を担う必要があることを学習させ、家事への積極的な態度を育成することが必要である。

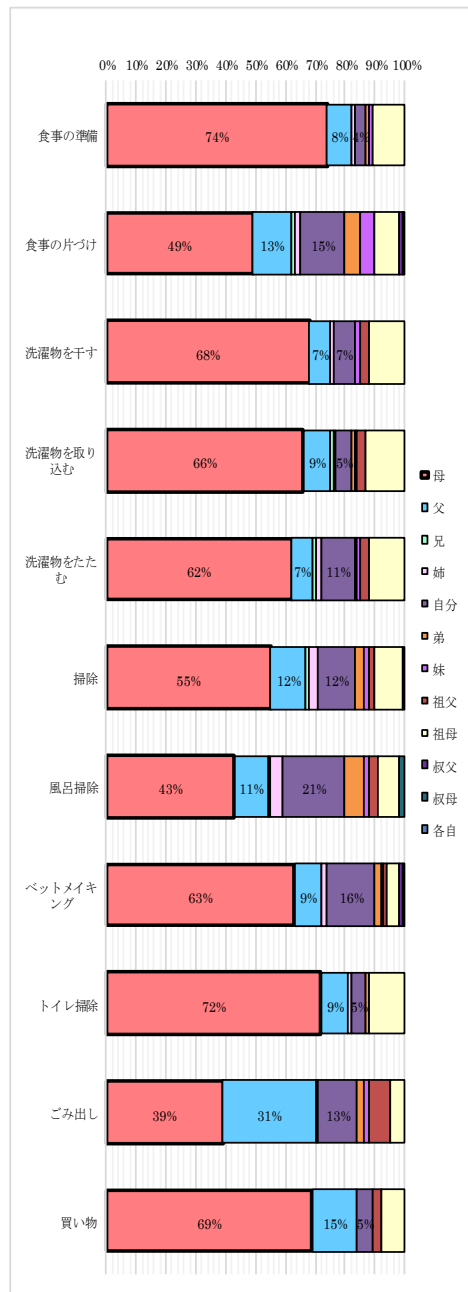


図1 小学生時代に誰が家事を担っていたか

(2) 小学校の家庭科でできるようになった家事は何か
食事に関する項目の割合が最も高いことが分かる。これは、調理実習により食材を切ったり火を使ったり、皿や用具を洗ったりなどの調理の基本技能が習得されたことを意味している。

一方で、ペットメイキング及びトイレ掃除は10%に満たないほど、割合が低い。衣・食・住・消

費生活の4つの分野に分けてみると、食の分野の割合だけが大きく、他の分野はすべて割合が低い。生活に必要な技能が身に付いているとは言いにくい。このことから、家庭科の授業では食の領域においては力が入られ実習なども充実しているが、衣や住などほかの領域においては充実した授業が行われていないのではないかと推測できる。洗濯の実習や整理整頓の実習など家庭科の中で、生活の技能の習得ができるよう子どもたちに体験させていくことが必要である。食事の準備の項目はできるようになったと答えたものが多いが、図1と比較すると担っている割合がとても低く、できたことが実際の家庭生活には活かされていないことが分かる。家庭科は生活の自立を目指し、小学校段階では基礎・基本の習得が目標とされている。家庭科でできるようになったことが、実際の生活に活かされなければ取得したとは言いがたい。授業の中で子どもたちから「できた！・分かった！」という気持ちを引き出しつつも、「家でもやってみたい！」と実際の生活にも活かそうとする態度をどのように引き出すかを考えていかなければならない。

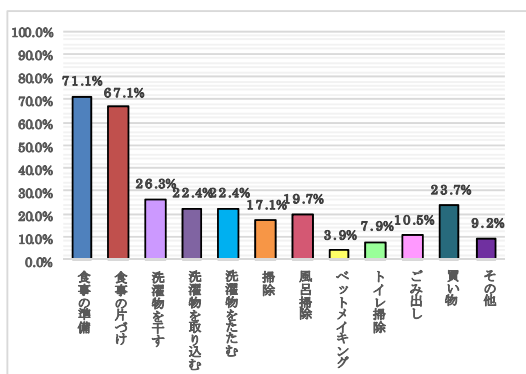


図2 小学校の家庭科でできるようになった家事

(3) 大学生になった現在誰が家事を担っているか

小学生時代と比較すると、自分が担う割合が増加したことが分かる。これは、大学に入って独り暮らしになったこと、生活経験を積んだことによりできることが増えたことが要因と考えられる。独り暮らしにより他にやってくれる人がいないからしかたなく自分がやる、では積極的な家事参加とは言い難い。自分ができることをできる時間に率先して行う態度が家事参加には必要である。経験を積んでできるようになったことから、家事参加に繋がったとするのであれば、小学校の家庭科では子どもたちに多くの

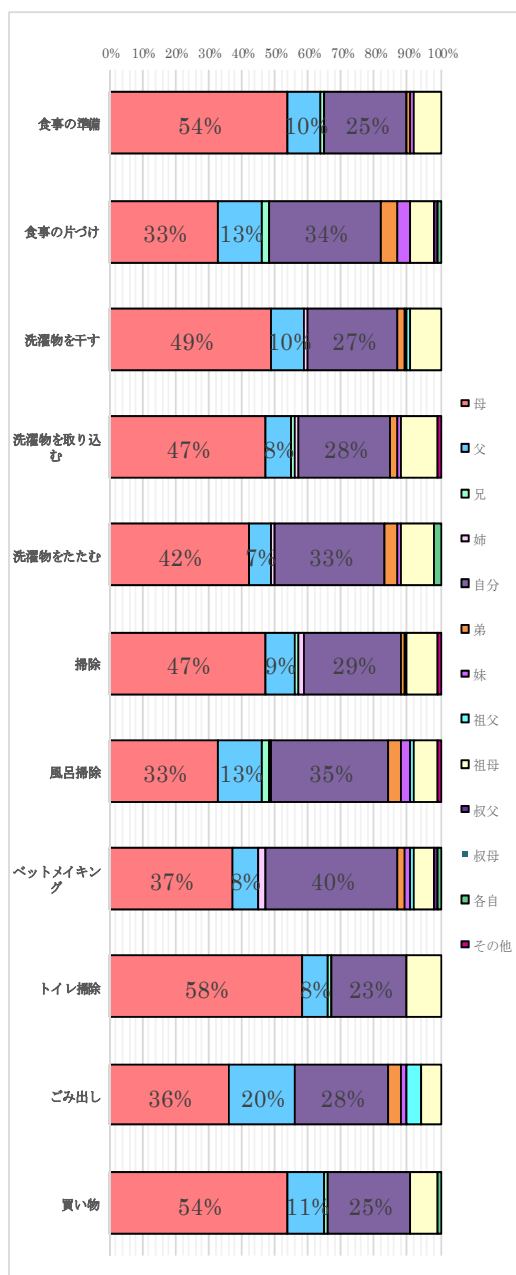


図3 大学生になった現在、誰が家事を

ことを体験させ「できた・できる」という自信をつけることが大切である。調理実習や被服実習などを通して、成功体験を多く与えることによって「家でもやってみたい」という気持ちを引き出すことができる。

自分が担う役割は増加した分、母親の担う役割は減少したが、その他の割合は変わっていないため、小学生時代と同様に母親が多くの家事を担ってい

る。父親の担う役割が一番高い項目はごみ出しと変わらず、その理由も同じだと考えられる。回答者の年齢はすべて20歳以上と生活的に自立していてもおかしくない歳ではあるが、全ての項目において50%を超えるものはなく、多くて40%のベトナムメイクである。このベトナムメイクの項目以外は母親よりも担う割合が高いものは無く、母親に家事や生活を依存しているのが分かる。一番低いものは23%のトイレ掃除、次に食事の準備、買い物と続いていく。この3つの項目は、小学生時代においても割合が低い。小学生時代の考察では、技能が未取得のため担う割合が低いのではないかと述べた。ここから、小学生時代から技能が身につけていない項目においては、成長した後も担う割合は伸びにくいのではないかと推測できる。「できないからやらない」という考えが頭頭に置かれ、「やらないまま」になっているからこそ「できないまま」なのではないか。つまり、できないと思っている項目こそ積極的にいき技能を身につけていくことが必要だろう。小学生時代からできない項目は成長してからも伸びづらいということは、小学校のうちに生活に必要な技能を身に付けておくことが重要である。

また買い物においては、新鮮な肉や野菜、魚などの選び方が分からないなどの理由から、買い物を担うことができないのではないかと推測できる。生鮮食品や加工食品の取り扱い方及び選び方などについては、中学校の家庭科で指導することになっているが、身に付いていない現状がある。小学校の家庭科でも、中学校家庭科の学習内容を見越して野菜や加工食品について食の領域と消費生活の領域を合わせて、子どもたちに指導していくことが求められている。家事は生活すべてに関わる活動である。そのためどこまでが家事で、どこからが家事ではないのかという境界線はない。小学校の家庭科は生活の自立のための基礎を作る役割を担っている。広範囲に及ぶ家事を支えるために家庭科で基礎を学ばせるのであれば、教える内容も偏りなく幅広くなければならない。食の領域には時間をかけ、衣や住の領域にはあまり手を伸ばさないのではいけない。どの領域においても偏りなく、基礎作りを行わなければならない。小学校段階での生活技能の基礎作りが、その後の家事参加への糧になるのである。

(4) 家事に対してどのような態度を取っていきたいか
男女ともに積極的に家事に参加しようと答えているものが多い。しかしその割合は6割に留まっている。そこまで関わりたくないと答えているものもいることから、家事に対する意識の低さが残っていると推測できる。家庭科を通して、家事について関心を持たせ積極的な参加態度を100%にしていかなければならない。

家事を行う技能があるもの、家事を行う時間があるものとする、家庭の中で家事を行う人が限られ偏りが出てしまうのではないだろうか。積極的な態度とは、苦手とする内容のものでも取り組もうとする態度である。できるものだけ行うのでは、積極的とは言い難いだろう。できる人が行う及びできることだけ関わるという意識は、生活に必要な技能が身に付いていないことからきっていると推測できる。

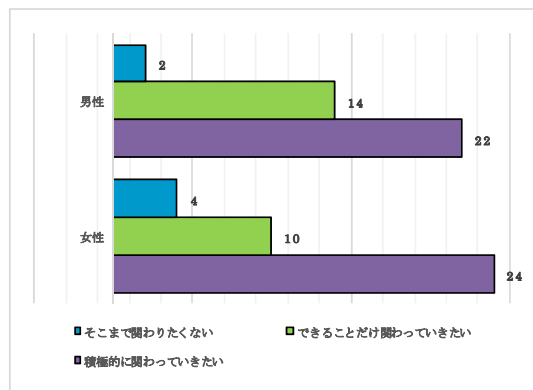


図4 家事へのこれからの態度

家庭科を通して生活に必要な技能を習得させていくことが、家事参加に大きく影響すると考える。小学校段階において、生活に必要な技能を習得するための土台を作り、基礎を身に付けさせることにより、真の意味での家事に積極的に関わっていく態度を育成させなければならない。

4. 小学校家庭科の実態

(1) 小学校の家庭科でどのようなことを学んだか

最も回答数が多いのは、調理手順・調理方法である。次に、食品の栄養、布を用いた製作、調理器具の取り扱い方と続いている。最も回答数が低かったのは、室内環境の整え方である。衣・食・住・消費生活の4つの分野に分けてみると、食の分野について学習したとの回答が多いことが分かる。衣服の分野、特に布を用いた製作についても多くのものが学習して

いることが分かる。一方で、住居や消費生活の分野はあまり多くない。回答が少ないものに関しては、その分野について授業が行われたとしても記憶に残っていないのではないかと推測できる。家庭科のすべての分野が家事と繋がっている。そのため、授業の中では家庭生活に活きる多くの事柄を取り扱っている。なんとなく学習した覚えがある程度では、学習が定着したとは言えず生活に必要な技能も身に付いてはいないだろう。家庭でもやってみたくと思えるような記憶に残る授業を行わなければならない。

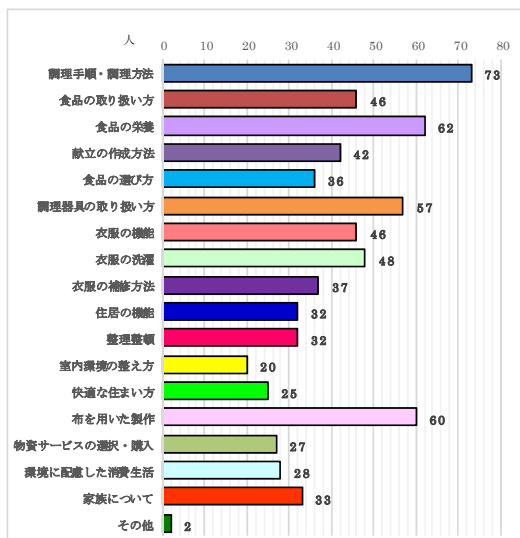


図5 小学校家庭科での学び

(2) 小学校の家庭科でどのような体験をしたか

調理実習や被服実習を体験したと答えている者が多い。一方で、掃除や整理・整頓、洗濯実習は割合が低い。図5と比較すると、実習を体験した割合が高いものは学習したと答えている数が多く、割合が低いものは回答数が少ない。ここから、実習は記憶に残りやすく学習の定着にもつながりやすいと推測できる。

小学生の頃にできなかった家事は大学生になった現在も担っていないということが分かった。掃除の割合が低いのは、体験が少なくやり方が分からないためであると考えられる。小学校の家庭科の学習内容では、身の回りの整理・整頓や日常よく使う場所の清掃の仕方について指導するようになってきている。日本の多くの小学校では清掃の時間が設けられており、子どもたち自身で教室や廊下などを掃除している。この清掃の時間と家庭科を連携させて、学校の施設・設備を用いて実践することで学習経験を積む

ことができ、家庭生活での実践にもつなげられるのではないかと推測できる。

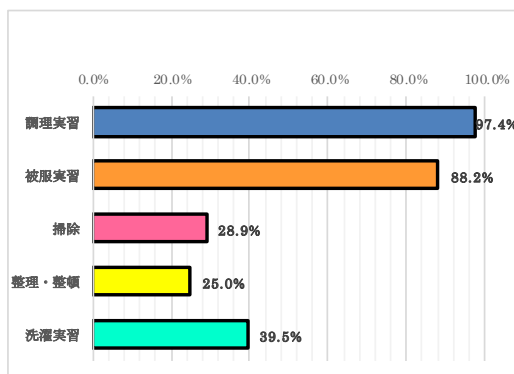


図6 小学校家庭科での体験

調理実習は体験している割合が高いが、家庭で担っている割合は4%ととても低い。ここから、学習した内容が家庭生活に活かせていないことが分かる。小学校で取り扱うことのできる内容が少なく、なかなか家庭に活用できないのではないかと考える。しかし、家庭と連携することで火や包丁などの調理器具を取り扱ったり、副菜を作らせてみたりと学習した内容の範囲でもできることを子どもたちが率先して行うことができるよう、環境を整備し機会を与えることが必要なのではないかと考える。

小学校の家庭科では生魚や生肉は取り扱うことができず、学習内容も限られている。そのために、子ども自身が一食分を作るのは難しいし、できないと考えていたり、保護者が火や包丁などを使わせるのは危険で、子どもに料理は難しいと考えていたりすると考える。そもそも料理は母親がするものだという概念が働き、子どもにやらせないという家庭もあるだろう。しかし、小学校の家庭科は生活に必要な技能の基礎・基本を学ばせており、一食分の食事を作ることが目標となっている。ご飯やみそ汁、卵を使用した主菜や野菜を使用した料理を作ることは可能である。

子どもたちができるようになったことを家庭に伝え、家庭と連携して子どもたちが家事に積極的に参加できるように子どもたちへの動機づけや保護者への理解を促すことが重要である。また家庭科での学習は、家庭生活において実践していくことで深く定着していくものだとも考える。そのためにもやはり、家庭生活においての実践する環境を整えることが求められているのではないだろうか。

(3) 小学校の家庭科で学びたかったことは何か

調理手順・調理方法が最も多い。次に、食品の選び方、衣服の洗濯、食品の取り扱い方・衣服の補修と続いていく。最も低い項目は布を用いた製作であった。全ての項目において回答数が0というものは無かった。

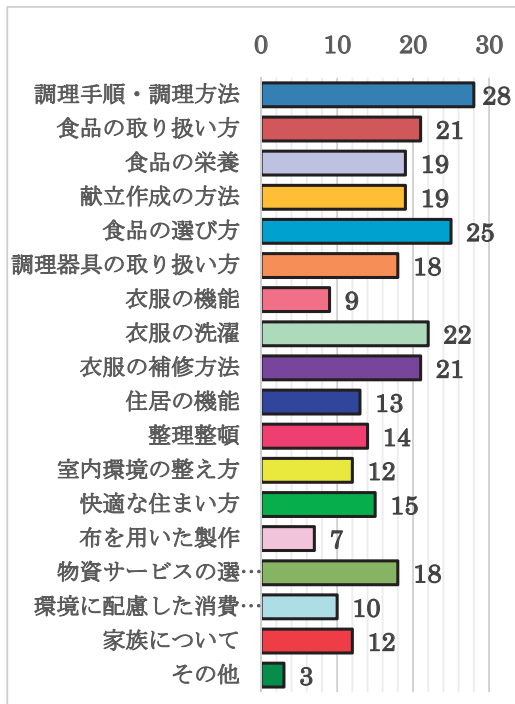


図7 小学校家庭科で学びたかったこと

家庭科では子どもたちに「家庭でもやってみたい」という意欲を持たせるのと同時に、家庭でも実践できるための知識・技能を高める質の良い授業が求められているのではないだろうか。ただ学習内容を教えるのではなく、ただ実習を行うのではなく、子どもたちの実態に合い、生活に必要な技能を身に付けるために工夫された授業を行う力が教員には求められる。

家事は生活を支えるために必要な活動であり、自分が行わなければならない活動である。家庭科を通して家事とはどのようなものなのか、家事は本来誰がやるべきものなのかなどを教えていき、子どもたちが家事に対して積極的な態度を取れるようにすることも必要だろう。子どもたちの自立した生活の支えとなる家庭科だからこそ学ぶ内容は多岐にわたり、一つもかけてはならない。家事も生活を支える重要な柱となるからこそ、生活について学ぶ家庭科の中で指導していかなければならない。

5. 家事への積極的な態度の育成に向けて、家庭科に求められるもの

小学生のうちに身につけてほしい家事に関する技能と家庭科での学びを対応させた表1を作成した。家庭科の内容の項目は本時の学習目標とする。

表1 家庭科から学ぶ家事

| 家事の項目 | 家庭科の内容 | |
|----------|----------------------------|---------|
| 献立を作成する | 1食分の献立を立てよう！ | B領域・食生活 |
| 食材を切る | 食材にあった切り方を考えよう！（調理実習） | |
| 食材をいためる | 火を通すことでどのように変わるかな？（調理実習） | |
| 食材をゆでる | ゆでると色やかさはどうなるかな？（調理実習） | |
| 食材を調理する | 卵料理を作ってみよう！（調理実習） | |
| ご飯をたく | ご飯をたいてみよう！（調理実習） | |
| みそ汁を作る | オリジナルのみそ汁を作ってみよう！（調理実習） | |
| 一品作る | ※各調理実習を通して作れるようにする。 | |
| 一食分の食事作る | 調理計画を実行しよう！（家庭での振り返り） | |
| 配膳する | ※各調理実習を通してできるようにする。 | |
| 食器を洗う | ※各調理実習を通してできるようにする。 | 衣生活 |
| 食器を拭く | ※各調理実習を通してできるようにする。 | |
| 衣服を正しく洗う | 衣服に合った洗剤・洗い方を考えよう！ | |
| 洗濯物を干す | 洗濯をしてみよう！（洗濯実習） | |
| 洗濯物を取り込む | 洗濯をしてみよう！（洗濯実習） | |
| 洗濯物をたたむ | 洗濯をしてみよう！（洗濯実習） | |
| 衣服の補修 | 布を使って作ってみよう！（被服実習） | |
| リビングの掃除 | 身の回りを整えよう！ リビング編（掃除実習） | 住生活 |
| キッチンの掃除 | 身の回りを整えよう！ キッチン編（掃除実習） | |
| 自分の部屋の掃除 | 身の回りを整えよう！ 自分の部屋編（掃除実習） | |
| お風呂の掃除 | 身の回りを整えよう！ お風呂編（掃除実習） | |
| トイレ掃除 | 身の回りを整えよう！ トイレ編（掃除実習） | |
| ベッドメイキング | 身の回りを整えよう！ ベッド編（掃除実習） | |
| ごみ出し | 分別してごみ出しできるかな？ | C消費生活 |
| 買い物 | 買い物の達人になろう！ （買い物実習） | |

子どもたちの家事に対して積極的な態度を育成するための授業を、提案する。

- 1) 題材名 「家庭生活って何だろう？」
- 2) 題材設定の理由

家庭生活とは、子どもたちの成長を支えているとても重要なものである。子どもたちにとっても身近なものであるが、身近過ぎるゆえに深く考えず生活を送っている子どもたちが多いのではないか。本題材を通して、自分や家族が家庭でどのように生活しているのか関心をもって見つめさせ、生活についての理解につなげるようにする。また、子どもたち自身で、自分が家族から支えられているとともに、自分の存在があって家族を構成しているという相互関係に気付かせることにより、家族の一員としての自

覚をもたせることが重要であると考え。子どもたちの多くが家事を保護者任せにしているところがあり、家事に対して積極的な態度を身につけてはいない。そのため、題材の中で家事について触れることにより、家事とは家庭生活を支えている重要な活動であることに気付き、自分が行わなければいけないと意欲をもたせる必要がある。本題材を通して自分の家庭生活を見つめ直すことによって、より良い家庭生活に向けて主体的に改善をしていく実践力につながっていきたい。

3) 目標

- ・家庭生活に関心をもち、進んで家庭生活をよりよくしようとする。(家庭生活への関心・意欲・態度)
- ・自分の家庭生活に課題を見つけ、その改善を目指して工夫している。(家庭生活への創意工夫)
- ・家庭生活の意味や家事の大切さがわかり、家族とコミュニケーションをとったり、積極的に家事に参加したりできる。(家庭生活への知識・技能)

4) 指導計画(総時間数 8時間)

- ・家庭科って何を学ぶの? 1
- ・家庭生活を考えてみよう! 1
- ・家族って何だろう? 1
- ・1日の生活を振り返ろう! 1
- ・家事について考えよう!(本時) 1
- ・生活の中でできることを探そう! 1
- ・活動計画を立てよう! 1
- ・実践の振り返りと目標を決めよう! 1

5) 本時の指導

① 題目 家事について考えよう!

② 目標

家事について活動の大切さを理解し、自分が行っていかなければならないと意欲を持つことができる。(家庭生活への関心・意欲・態度)

③ 授業の観点

目標を達成するために、海外に住む同世代の子どもたちの家庭での様子を伝えたり、日本と外国での子どもの家事参加時間を比較したり、家事について話し合わせ考えさせたりしたが、その手立ては有効であったか。

④ 展開

| 具体目標 | 学習活動 | 学習活動への支援(○)・評価(◇) |
|---|--|---|
| ○自分の家庭での活動について振り返ることができる。 | 1 起床してから寝るまで家庭でどのようなことを行っているか考える。 ・ご飯を食べたり、お風呂に入ったりしているよ。 ・家庭にはたくさん活動があるね。 ・1人の活動と家族での活動があるね。 | ○自分の家庭生活を振り返らせることにより、家事を身近に感じられるようにする。 ○身近な教材を取り扱うことにより、自然に授業に入れるようにする。 ○食事や入浴などは行う前に準備が必要であるということ、子ども自身が気づけるようにする。 ○課題を知ることにより、本時の学習に見通しを持てるようにする。 ○家事について考えさせることにより、家事が生活を支えている大切な活動だと気づかせるようにする。 |
| ○本時の課題を知り、家事について話し合うことができる。 | 2 本時の課題を知り、家事について話し合うことができる。 | ○家事を誰が行っているか質問することによって、自分があまり担っていないことに気付かせるようにする。 ○日本と外国を比較することにより、異文化理解もできるようにする。 |
| 家事について考えよう! | | |
| ○世界の子どもの家事事情について、理解することができる。 | 3 外国に住む子どもたちがどれくらい家事を担っているか知り、日本と比較する。 ・子どもが家事をしている国の方が多いね。 ・日本はあまり子どもがやってないね。 | ○比較を行う中で、家事は自分で行わなければならないものだと気づけるようにする。 ○自分の生活に置き換えて、何ができるか考えさせ、家庭生活でも活かしていこうと意欲を持たせるようにする。 |
| ○本時の学びから、家庭生活の目標を立てることができる。 | 4 家庭生活でどのようなことを行っていきたいか目標を立てる。 ・食事の片づけを自分でできるようにする。 ・自分ができることは率先で行う。 ・苦手なことにもチャレンジする。 | ○目標を立てることにより、家庭科での学びと家庭生活をつなげるようにする。 ○目標を立てさせ今後家庭科でまなぶことを伝えることにより、家庭科への学習意欲につなげるようにする。 ○誰かがではなく自分が行おうとする姿勢が重要であると伝えることにより、家事への積極的な態度を高められるようにする。 |
| ○本時の学習を振り返ることができる。 | 5 本時の感想を記入する。 ・家事の大切さが分かった。 ・これからは、積極的に家事を行っていきたいと思った。 ・自分ができることはやっついこうと思った。 | ○目標を立てることにより、家庭科での学びと家庭生活をつなげるようにする。 ○目標を立てさせ今後家庭科でまなぶことを伝えることにより、家庭科への学習意欲につなげるようにする。 ○誰かがではなく自分が行おうとする姿勢が重要であると伝えることにより、家事への積極的な態度を高められるようにする。 |
| ◇家事について活動の大切さを理解し、自分が行っていかなければならないと意欲を持つことができる。【活動の様子・学習プリント】 | | |

小学校家庭科で家事の考え方や家事を活動として積極的に行う基礎・基本と捉え直したい。

参考文献

竹信三恵子『家事労働ハラスメント』岩波新書、2013年

平成30年3月27日 受理

Elementary school home economics education and housework

Tomoko AKATSUKA, Natsumi WATANABE